

## 各地で話題の病害虫

### タバココナジラミ

学名: *Bemisia tabaci* (Gennadius)

英名: sweetpotato whitefly

本虫は平成元年に全国各地の施設栽培のポインセチアに大量発生して問題になった。翌年、関東・東海地方のトマト栽培地でトマト果実に原因不明の着色異常が発生した。特に静岡県ではトマト栽培農家の半数以上に発生し、発生面積は30ha以上にも及んだ。静岡県農業試験場で現地調査を行った結果、着色異常果がみられたトマトほ場には必ずタバココナジラミが発生していることが判



愛知県農業総合試験場 大野徹氏提供

明した。そこで、トマト栽培温室に本虫を放して調査したところ、明瞭な着色異常果が発現した。この症状は紅白トマトなどとも呼ばれ、果実の先端から放射状に未着色部分が残ри、症状が重くなると果実全体がいつまでも着色せず、正常果に比べると糖度が低くなる。着色異常が起こるメカニズムは、本虫が分泌する毒素又は媒介する病原体のいずれかが関与しているといわれているが、現在のところ不明である。

いずれにしてもトマト着色異常果を防止するためには、タバココナジラミの密度を低下させることが重要である。本虫は薬剤に対する感受性が低いことが知られており、効果的な防除法の開発が期待されている(海外のニュース参照)。

### スイセン葉先枯病(新称)

学名: *Phoma* sp.

昭和63年に福井県の促成栽培中のニホンスイセンに葉先の枯れる症状が多発した。

この症状は、従来8月下旬～9月上旬にかけての高温、乾燥及び塩害などにより起こる根の生理障害が原因と考えられていた。

その後、福井県農業試験場の調査によって *Phoma* 属菌によって起こる病害であることが明らかにな



福井県農業試験場 本多範行氏提供

った。本菌によるスイセンの病害は、わが国では報告がないことから、「スイセン葉先枯病」と命名された。病徴は主に葉身の先端部に発生し、葉鞘、花茎での発生は認められていない。病斑は初め褐色から黒褐色の紡錘形で、しだいに拡大した後、病斑内部の組織は枯死し、周縁部は黄変する。病斑の大きさは2cmくらいまでで株全体が枯死することはない。また、発病の軽い場合は葉先の周辺部が褐変するのみである。本病の発生は促成栽培で多く、9月下旬のスイセンの生育初期(出芽直後)から発生がみられ、開花初期の10月中旬に被害が多発する。

なお、本病の病原菌の同定及び防除対策については今後の研究が待たれる。



**ミカンカメノコハムシ(仮称)**学名: *Cassida obtusata* Boheman

昭和62年10月沖縄本島中部の石川市の早生温州みかん園で葉を食害しているカメノコハムシの一種が発見された。本虫は琉球大学東 清二教授の同定によると本邦未記録の *Cassida* (*Taiwania*) *obtusata* Boheman (仮称: ミカンカメノコハムシ) であることが判明した。これまで知られている本種の分布地域は中国南部、台湾、インドシナ半島である。平成2年秋現在、沖縄本島全地域に発生していることが確認されている。



ミカンカメノコハムシ

成虫の体色は背面が暗緑色個体と光沢のある赤褐色の個体があり、体長は3.7~4.5mmである。卵は長楕円形で褐色である。本種の本来の食草はヒユ科のイヌビユ、ツルノケイトウで、成虫はかんきつ類の葉を食害するが、幼虫は生育できない。早生温州みかんへの被害は樹園に生えているイヌビユなどで発生した成虫が、下草の除草などによってみかん樹上に移動し、葉裏に寄生して食害することである。

防除法は、春先から夏にかけて果樹園内外のヒユ科の雑草の防除を徹底し、本虫の産卵を防止することが重要である。また、有機リン剤による他の害虫との同時防除も有効である。

**スモモ炭そ病(仮称)**学名: *Colletotrichum gloeosporioides* Penzig

昭和62年に長野県のブルー栽培地で原因不明の腐敗果が見つかった。その後の調査で本病は炭そ病菌によって起こる病害であることが明らかになった。

病徴は果実及び葉に現れ、果実の病徴は、果実表面に径0.5~2cmのややへこんだ病斑を生じ、病斑上に橙色から橙白色で古くなると橙褐色から褐色のべとべとした孢子塊を生じる。病斑の数は多いもので1果あたり20個ほどになるが多くは1~



長野県果樹試験場 飯島章彦氏提供

3個である。この症状は7月下旬から現れ収穫期まで続く。り病果は早期に落下するが、樹上に残ったものは乾燥してミイラ果状を呈する。

葉の病徴は、葉面に灰白色から茶褐色の円形または不整形の病斑を生じ、同心円状の輪紋を生じる。葉柄には暗赤褐色のかさぶた状の病斑を生じる。り病樹では枯死した葉が目立ち、落葉したところから樹脂を漏出する。

本病の発生はブルーで認められているが、日本スモモでの発生は確認されていない。

防除対策としては、果樹園内の風通しを良くし、り病果は見つけ次第除去することが重要である。